

追悼平岡敏夫先生：  
「最後の戦中派」もしくは「弔いの文学」

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2022-08-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/00029097">http://hdl.handle.net/10297/00029097</a>

# 追悼平岡敏夫先生

— 「最後の戦中派」 もしくは 「弔いの文学」 —

南 富 鎮

## 1 記憶と風景

平岡敏夫先生が亡くなられて既に4年余りになる。

新聞誌上で訃報に接したときには大きな衝撃を受けた。30年に近い自分の日本生活がようやく一段落したような感覚であった。そうした気持ちを短い追悼文章で書こうとしたが、いざ書こうとするとそれがなかなか書けない状態であった。思い出がいかにも生々しい。しかもその思い出が現在の時間と結びつき、現在と切り離された真の過去記憶にならないのである。思い出がいまなお滞日の私の現在記憶に浸潤され、感情だけが先走って文章が定まらない。

現在は刻々と時間的過去を生むが、それが真の過去記憶となるためには記憶としての遠景化が必要かもしれない。いわゆる記憶の風景化である。古人が3年の喪に服したのはこうした記憶の遠景化（過去化、風景化）の問題が介在していたのだろうか。この一文が遅くなったのもそうした理由である。

30年近い日本生活が一段落したような感覚になったのは、私の日本生活が平岡敏夫先生とともに始まったからである。1990年10月、日本文部省国費留学生として来日した時の指導教員が平岡敏夫先生であった。奇しくも私が先生のおわばハンコをもらう最後の指導学生になった。修士1年を終えたとき、先生は群馬女子大学学長に赴任なされた。その後、新しく赴任した池内輝雄先生のご指導をいただいたが、平岡先生とは筑波大学・群馬女子大学の共同文学散歩、松本清張研究会などで引き続き長きに渡りご指導をいただいた。当然ながら、忘れられない数々の思い出がある。その思い出は風景の一場面のようにふと思い出される。

## 2 「忘れえぬ人々」、そして佐幕派の文学

佐幕派の子弟で夭折（36歳）した国木田独歩には「忘れえぬ人々」という作品がある。風景と密着した3つの記憶が描かれているが、題目が気になって今回読み直してみると、語り手である「僕」の次のような感覚は平岡敏夫先生の文学精神にきわめて近いような印象を受けた。生きる者への根源的な「哀傷」の気持ちである。

『要するに僕は絶えず人生の問題に苦しむでゐながら又た自己将来の大望に  
圧せられて自分で苦しんでゐる不幸せな男である。

『そこで僕は今夜のやうな晩に独り夜更に燈に向かつてゐると此生の孤立を  
感じて耐へ難いほどの愛情を催ほして来る。その時僕の主我の角がぼきり  
折れて了つて、何んだか人懐かしくなつて来る。色々の古い事や友の上を  
考へだす。其時油然として僕の心に浮むで来るのは即ち此等の人々であ  
る。さうでない、此等の人々を見た時の周囲の光景の裡に立つ此等の人々  
である。我れと他と何の相違があるか、皆な是れ此生を天の一方地の一角  
に享けて悠々たる行路を辿り、相携へて無窮の天に帰る者ではないか、と  
いふやうな感じが心の底から起つて来て我知らず涙が頬をつたふことがあ  
る。其時は実に我もなければ他もない、ただ誰れも彼れも懐かしくつて、  
忍ばれて来る。（国木田独歩「忘れえぬ人々」）



平岡敏夫先生との文学散歩  
（漱石胸像の前にて）

「忘れえぬ人々」は「僕」の3人目の忘れえぬ人が「亀屋の主人」であり、「秋山」では無かつたことへの謎解きとして考察されることが多い。しかし私にはこの謎が平岡先生の研究に一貫する「佐幕派への思い」と一脈相通じているように思えてならない。平岡先生の研究の中心が、明治維新と

近代化を主導した側ではなくなぜ佐幕派であったのかという答えは、国木田独歩「忘れえぬ人々」の謎とパラレルになっているような気がする。その奥底には文学と人間に対する共通の思いがある。いわば、人間に対する根源的な哀傷の気持ちである。いうまでもないが、平岡敏夫先生の佐幕派への思いは、「敗者への共感」「弱者への同情」「滅びゆく者への憐憫」「死者への哀悼」へと広がり、平岡研究の思想的な核になっている。そしてその恩恵をもっとも受けたのはアジアからの留学生であったことも事実である。先生はアジアからの留学生に対してある種の特別な思いを抱いていたが、それまた佐幕派への思いと相通じていると思っている。

中国・韓国・台湾・タイ・インドネシアなどには数多くの平岡門下生がいる。直接に指導を受けた留学生もそうでない元留学生もこぞって先生を恩師として慕っているのである。日本においては極めて珍しい現象であろう。おそらくそれぞれは先生との忘れられない思い出をおのおの持っているであろう。アジアから来日し、日本で過ごした青春の一時の「光景の裡に立つ」姿として先生の存在が「懐かしくつて、忍ばれて来」ているのではないだろうかと推測している。私にもそうした場面が多い。

これは私だけではないだろうが、学会発表での拙い発表に厳しく詰められた時には「日本語がうまく伝わらなかったかもしれませんが、彼が言いたいの是要するに…」というお言葉で、その場を救ってくださったのも一再ではない。また歳末には留学生やその家族が共同宿舎で先生を取り囲み、一緒に餃子を作ったり、キムチ鍋料理を作ったりして楽しんだ記憶も多い。おそらくこれも留学生らの共通記憶になっているだろう。さらに鮮明な記憶は、筑波大学の第2エリア前のバス停に向かう途中、第3学郡棟横の広大な荒地を指さしながら、いきなり「南くん、あそこに雉がすんでいるよ。いるのかな」と、好奇心に満ちた目で雉を真剣に探していた顔である。雉よりも先生の好奇心に満ちた童顔に私がビックリした。

### 3 最後のお手紙

先生は2018年3月5日に亡くなられたが、そのおおよそ半年前の2017年8月8日に先生から次のような短いお手紙をいただいた。拙著『松本清張の葉脈』への返礼のかたちで、生前最後の著作である『夏目漱石—『猫』から『明暗』まで』に挟まれたものであった。恐れ多いが全文を紹介する。

南富鎮様

御著書『松本清張の葉脈』をありがとうございました。

入院中のため御礼が遅くなりました。癌三つを体験し（転移ではないようです）、体の自由が効かなくなって来ました。

五冊目の漱石文集をお送りします。

「要するに、文学研究者の存在が埋没し、作家や作品に寄生している」（御著はしがき）になっているかどうか、御批評下さい。

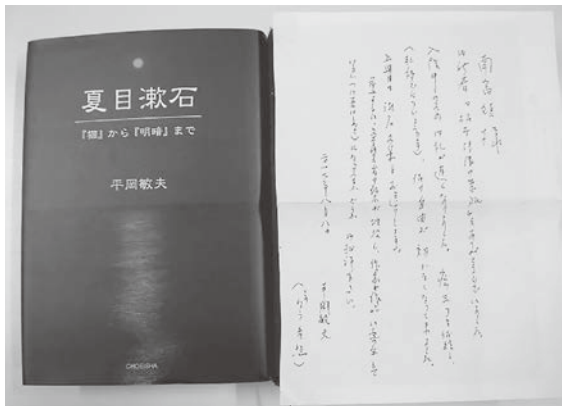
二〇一七年八月八日

平岡敏夫

（このウラ参照）

青天霹靂のような内容に驚愕した。また先生の厳しい研究姿勢に圧倒され、懼れおののき、しばらく控えていた。訃報に接したのはその半年後であった。はからずもこの文章が先生からいただいた最後のお手紙となった。

ちなみに、「このウラ参照」には図書新聞2017年7月22日付けの井川博年「2017年上半期読書アンケート」のコピーで、そこには3冊の本が紹介されていた。その最初に紹介されたのが平岡敏夫『夏目漱石—『猫』から『明暗』まで』である。短い全文は次のようにある。「『猫』から『明暗』まで」と題し、過去に発表された文章を纏めて一冊にしたもの。どのページを開いてもいいが、特に岩波文庫「坊ちゃん」についての文章など、『佐幕派の文学史』の著者ならではの熱気が伝わってくる。この本で私、漱石は全部読んだ気になりました」とある。



平岡敏夫先生のご著書とお手紙

蛇足だが、先生のお手紙について少し補足説明をする。「五冊目の漱石文集」というお言葉は、拙著あとがき「本書は、日本語で書いた五冊目の著作である」という私の文章に呼応する。先生のご著作は40冊を超えており、大いに恥ずかしい思いをしたが、さらに恐れ入ったのは、「要するに、文

学研究者の存在が埋没し、作家や作品に寄生している」(御著書はしがき)になっているかどうか、御批評下さい」という問いかけであった。引用箇所は私じしんの持論を書いた箇所である。平岡先生の研究思想を理解するため、恐縮だが、あえて拙文の前後部分を引用する。

日本の文学研究者には「作家が好きだから研究する」という不文律のようなものがあり、従来の作家論や作品論は、作家や作品の奥底の襞に思いを巡らし、作家の胸中を忖度し、深奥にあるという高度な意図を慮り、作家や作品との密接な心的関係を共有しながら、ほとんど狎れ合い的な贅辞を並べる傾向がある。要するに、文学研究者の存在が埋没し、作家や作品に寄生している。本書はそのような方向を意図しない。そのため、本書は必ずしも清張文学の真骨頂や面白みや再発見や偉大性を盛り立てるようなものではない。文学研究者は作家に無限の理解を示す信奉者でもなく、作品にあらゆる奉仕を厭わぬ隷属者でもない。研究者は作家や研究対象と自己との緊張した対決の中で、別の時代を生きる自己を表現していかなければならない、と私は考えている。(「自己の文学」拙著『松本清張の葉脈』はしがき)

拙著のはしがき「自己の文学」で、私は「少なくとも文学研究は「真理」や「真実」を追求するようなものではなく、研究者個人の単なる文学行為に過ぎない。客観的事実を究明する作業ではなく、対象に仮託する自己の心的論理を創作していく作業である」とも書いた。直感的に、先生のご指摘は私の持論が持つ危うさについてのご指摘のように思われた。先生の文学研究は基本的に作家や作品について徹底的に拘泥することである。作品(登場人物)と作家への無限の理解と愛情を前提とする。それが終局的に作家や登場人物という人間存在一般への哀傷の気持ちとなる。要するに、人間存在(作家と登場人物)への温かい理解と同情、深い共感が平岡敏夫先生の強靱な文学観なのである。

#### 4 文学研究と戦争体験

今回、先生から送られた『夏目漱石—『猫』から『明暗』まで』を読んでいるうちにとても気になった文章があった。『「門」—野上白川『崖下の家』・前田愛への反論』である。前田愛氏への反論として書かれた寄稿文だが、ここに先

生の文学研究観が凝縮されているように思われた。前田愛『都市空間のなかの文学』は今となっては古典となっているが、それに対する先生の評価は手厳しい。文学研究の本質に関わる問題だからである。作品と作家を離れた文学研究に対する警戒心とも言えようか。

この〈崖上〉と〈崖下〉への着目から、前田氏は精緻な分析を展開し、〈都市空間のなかの文学〉の一例証として「門」に新たな光を当てているが、総じて氏の研究には、埋没している作品の発掘というよりは、〈名作〉の文化記号論的分析という相貌が感じられる。この「山の手ツツクの奥」の「門」言及には漱石作品以外にも「窮死」「竹の木戸」「駅夫日記」の名は出ているものの、これら著名の作品でさえ「山の手から東京の西郊にかけてのドラスティックな変貌」をうかがうよすがとしてあげられるのであり、〈東京空間〉という視点からさまざまに加味され、いろどり鮮やかに美しく料理された、既成のメニューとしての作品論という感じを覚える。既成の評価・価値観はかわらず、ただ〈都市空間〉という新しい視点から〈名作〉がきわめて精緻な分析を受け、化粧なおしされて登場しているのである。

先生の温厚な性格を考えると反論は手厳しいが、文学研究が文化記号論的分析によって歴史研究や社会研究の一端となっていくことへの抵抗であろう。テキスト論やカルチュラルスタディーズの方法論が文学研究を蝕んでいくことへの憂慮であろうか。

じつはこの反論のきっかけを作ったのは前田愛氏の「作品論という幻影」(『現点』2号、1983年10月)である。前田愛氏は、作品論や作家論の旺盛は「研究の細分化と分業体制を規定の事実として肯定する怠惰な精神」であるとし、そのような「学界のゲイトキーパー」が平岡敏夫であると示唆しながら、「ここに欠けているのは、なぜその作品をとりあげなければならないか、というひとつの素朴な問いである」と批判したのである。こうした前田氏の名指しの非難に、平岡先生は次のように反論している。

「なぜその作品をとりあげなければならないか」という素朴な問いには、野暮な答えのようだが、作品が呼ぶからとしか言いようはない。無数の忘れられた作品が呼んでいる。そんなに「新しい芸術作品」「新しい文化状況」にばかり目を向けなくて、一度でもいいから掘り起こしてみてくれと呼ん



でいる。

平岡先生を個人的に知っている研究者や多くの門下生たちは先生のような論理にやや戸惑うであろう。なぜなら、先生は長年定期的に文学散歩を主導なさっており、作家と作品に纏わる風土と空間をこよなく愛していたからである。漱石の跡を訪ねてパリやロンドンを歩き回って精査した論考があり、鷗外の恋心をさぐるためにベルリンを探訪した記事があり、日露戦後世界に思いを寄せてアメリカのポーツマスを訪ねた感慨深い文章もある。文学散歩時に作家作品を語る先生の圧倒的な博学と情熱は神がかっているところさえある。一見して両者は共通しているように見え、先生の反論はやや強引にも映るが、その根底には譲歩できない文学観の相違があったかもしれない。先生は反論の最後に、「作品と作品の間にしか文学史の秩序が成立できないこともまた忘れてはならない事実なのである」と明言している。

引用文の『『門』—野上白川『崖下の家』・前田愛氏への批判』は、前田愛氏の『現点』誌上の「作品論という幻影」（2号、1983年10月）への反論として1984年4月『現点』3号に寄稿されたものである。原題は「『門』と『崖下の家』—作品論と文学史論」である。同論は1987年9月『漱石研究 ESSAY ON SŌSEKI』（有精堂）において『『門』—『崖下の家』から—』という題で再録され、最後の遺作『夏目漱石—『猫』から『明暗』まで』では『『門』—野上白川『崖下の家』・前田愛への反論—』として再再録されている。前田愛氏が早世（56歳）したのは1987年7月であり、再録が1987年9月、再再録が2017年4月であったことを考えると、夭折（35歳）した尾崎紅葉に対する夏目漱石の厳しい態度のように、この文学観には先生にとっては一歩たりとも譲れないものであったと推測される。文学研究が時代流行によって、都市論、カルチュラルスタディーズ、ポストコロニアリズム、場合には私の言う「自己の文学」等々に変貌（料理）され、再解釈（化粧なおし）されることへの妥協できない拘泥がうかがわれる。先生の拘泥について、今回、読み直すなか、私は「作品」を「戦争」に置き換えてようやく理解できた。

つまりこうである。戦争（敗戦）が単なる文化記号によって勝手に解釈されることを許されないことと同じ理由で、文学作品が単なるテキストという文化記号として勝手に解釈（料理）されてはならないということであろう。作品を作家の人生や時代背景から切り離したテキストとして再解釈することは、敗戦の意味を任意に再解釈（化粧直し）する行為にも通じうる。こうした行為によっ



て膨大な人間の犠牲は文化記号となり、個々の死は抽象化される。先生の激しい抵抗の根底には、敗戦とその膨大な犠牲が単なる文化記号として処理され、勝手に化粧直しされ、新たな「現在性」によって過去記憶が次々と風化され、変質されていくことへの警戒があったのだろう。

先生のお手紙にある「要するに、文学研究者の存在が埋没し、作家や作品に寄生している」（御著書はしがき）になっているかどうか、御批評下さい」という私への問いかけに、私は忸怩たる思いをした。私じしん、文学を文化研究と見做し、カルチュラルスタディーズ、ポストコロニアリズム等々の論文を多数書き、あげくの果てに最近「自己の文学」を言い出していたからである。三つの癌を経験しながら、自由の効かない手で一筆を書き、書籍とともにお送りくださったことの意味は私に重くのしかかる。文学研究の終焉が盛んに叫ばれて久しいが、もしかしたら自分自身が先棒としてそれに拍車をかける側にいたのかもしれない。

## 5 戦中派の終焉と「弔いの文学」

平岡先生のご著書を読み返してみると、先生の佐幕派への共感が先生自身の戦争体験と深く結び付いていることが分かる。山路愛山の「精神的革命は時代の影より出ず」（『現代日本教会史論』）という言葉をごよく愛している。こうした佐幕派への思いが「敗者への共感」「弱者への同情」「滅びゆく者への憐憫」「死者への哀悼」へと広がり、それが埋没した作家や作品（あるいは登場人物）への共感となっている。そしてそうした追想が、先生ご自身の境遇や戦争体験とも重ね合わせられている。

今年、授業中に戦中派と言われる第三の新人らの作品を読んでいるが、一般的な言説とは裏腹に、彼らが戦争について繰り返し書いていることが分かった。以前の戦後派のように戦争を大上段のイデオロギーや観念で語ることはないが、彼らの作品には、私小説風の身辺日常の中に戦争が茫漠とした圧迫感として絶えず陰翳を醸し出している。平凡な日常のなかに突如敗戦の記憶が忍び込んでくる。安岡章太郎の作品に敗戦の陰翳を見出せないものはかえって難しいかもしれない。庄野潤三の描く日常の奥底には敗戦が影として透けて見える。小島信夫のアメリカがそうであり、吉行淳之介の逃避的な頹廢においても敗戦が揺曳する。遠藤周作は軽井沢のテニスコートでくり広げられる戦後風景に、「おい、俺は戦後は嫌いだよ」とまで主人公に言わしめている（「あまりに碧い空」）。そ

れはたとえば、登場人物たちが「現在」を生きるのではなく、「戦後」という「時代の影」を生きているようにさえ思われる。そしてその陰翳と影の核となるのが弔いである。平岡敏夫先生の文学研究にもこれが強く感じられる。第三の新人ら平岡先生の間には十年足らずの年齢的な開きがあるが、平岡先生が陸軍飛行学校の生徒という特殊な立場で終戦を迎えたことを考えると、時代感覚においてはほぼ同じだったのであろう。いや、それ以上だったのかもしれない。そのことに思いを致すと、先生こそ「最後の戦中派」であったように私には思える。

東アジアにおける文学の本質は基本的に弔いにある。記憶の記録である。いまはほとんど忘れ去られているが、前近代の士大夫が幼児期から漢文の素読を行い、漢詩文を錬磨したのは、怪力乱神を語る物語的娯楽を目的としたのではない。もちろん花鳥風月をめぐるためでもない。ましてや立身出世の科挙及第や王朝史の絢爛たる文章記録のためでもない。それらは一握りの選ばれた人間の特権に過ぎない。多くの士大夫にとって文学とは、日々発生する膨大な数の祭文や弔文、碑文を書くためのものであった。前近代の文学が弔いを最終目的にしたことを、近代以降を生きる私たちはすっかり忘れていたのである。

最後に、平岡敏夫先生の文学思想をもっともよく表す一文を紹介する。じつに名文である。この一文の紹介をもって追悼の終わりとする。

2022年5月5日

## 【別添紹介】

はるか向こうの若者たち—筑波にて—

平岡敏夫

三時からの会議にはかなり間があるので、昼食後、研究室の自転車で大学構内から外へ出た。新しい大通りからちょっと外れて村落へ入ると、昔のままの古い農家や門がまへの屋敷が点在する。一、二寸青い芽を出したばかりの麦畑がつつき、山茶花があちこちに咲いている。筑波山の双峰がくっきり見える。

畑のすみに碑がある。自転車から降りて読む。佐藤孝という二等水兵の碑だ。大正七年七月十二日、帝国軍艦河内が徳山湾で轟沈、六百名の乗組員とともに佐藤水兵も死んだ。明治二十八年この地で生まれたとあるから、二十三歳の若者である。妻と一女があった。彼をいたむこの漢文に心がひかれた。理髪店や

郵便局、雑貨屋などが並ぶ通りを過ぎると、三叉路になっていて、馬頭観音がある。その奥にも碑があった。日かげの電柱を踏んで碑文を読む。明治二十八年二月七日、騎兵一等卒根本由之助は、五騎で斥候に出た。大石橋にほど近いところで敵騎兵と遭遇、雪の中で馬の操縦困難をきわめ、長槍の敵騎兵に刺されて落馬、一騎が近づき、由之助君、由之助君と声をかけると、彼は早く去れとくり返し、自分は助からぬから仲間を逃がしたという。この声をかけた神永軍曹の依頼により選文したと郡長は記している。

農村の庭先にはまた碑があった。上等兵宮本久治のもので、彼は日露戦争に従軍、第三軍に属して旅順攻囲戦に参加し、赤阪山で戦死を遂げている。やはり妻と一女があった。一時間ばかり、野良に出たり、町なかに出たりして自転車走らせた。風もない小春日和のひっそりした縁側で、老人がほんやりすわっているのがよく目についた。上等兵田村儀三郎は奉天の大会戦に加わり、負傷、内地に送還され、結局は自宅で没している。そういう碑もあった。この村に生まれ、父母に孝に、小学校でも優秀で、入営しては上官にも愛された若者たちが、新妻や幼な児を置いて、遠く戦場におもむき、ついに生きて故郷へ帰ることはなかった。

石碑に刻まれた一字、一字に、若者を思う村の人々の心が生きてるように感じた。みんながみな、こういう漢文を読んだはずはなかろうが、心だけはよくわかっていたのである。墓地などへ行けば、もっと目についただろうが、日清・日露の碑はあっても、日中戦争、太平洋戦争にかかわる碑は、この一時間のきままな散策のなかでは見つからなかった。時代と戦争と民衆、それぞれの相違によっているだろうが、おびたしい動員は、戦争を日常化し、美談にすることもなくなった。こういう小さい村落をふくめて、国民と戦争との一体感が希薄となり、死者をいたむ気持ちもまちまちとなって行く。このほうがいっそう無惨である。

こんなことを思いながら、大学構内へ入って行くと、噴水のそばの芝生に、黒人女子学生、白人学生もまじった学生たちが思い思いに談笑しながら、日向ぼっこを楽しんでいた。古い石碑があちこちにある家々の縁側にひとりぼつんとすわってこちらを見ていた老婆の姿とはあまりにも対照的であった。現在の若者たちのはるか向こうに、二等水兵や騎兵一等卒、上等兵の若者たちが眠っている。戦場へおもむくまで、朝な夕な仰いだ筑波山のふもとに帰り、今は苔むした碑面を読む人とていないままに、彼らは静かに眠っている。

(昭和57・3「愛と自由」)